

ある萌芽

一

ザブツと、伸びたホースから出る水を頭から浴びて、ミロはぶるん、と一度大きく頭を振った。ドラム缶を縦から半分に割ったような羊たちの水呑場を、ピカピカに磨き上げてかいた汗を流したのだ。地を這うホースをくるくると手繰り寄せながら、ミロは頭の中でもう一度遣り残した仕事がないか記憶のリストを数え上げる。

短い湖水地方の夏は、もうすぐ秋と入れ替わる。その僅かの隙間から溢れるように命が迸る。顔の周りを飛び回る蜂や蠅、一日でも手を抜けば三倍にも伸びている畑の雑草、目に沁みるようなニア・ソーリの緑。春先に刈ったはずの毛をもう伸ばしている羊達。何もかもが伸びて動いて留まる事を知らない夏。あつという夏の夏だった。

何重もの輪になったホースの束を、納屋の壁にぶら下げる。昔は背伸びして引つ掛けていた場所に、今は腕を伸ばすだけでとどく事が出来る。自分もまた、夏の生き物たちと同じように時間を刻んだのだな、とミロは感慨深く思う。濡れたTシャツを脱ぎ、水場で簡単に洗うと、強く絞つて干し場に吊るしておく。母屋の扉を開けると、夏休みの始めに同級生のカミュ・パロウが泊まりに来た時に刻んだ互いの身長印

が目留まった。

二本の並んだ線の、高い方がカミュのもので、低い位置にあるのが自分のものだ。けれど、今自分の脳天からすつと指の腹を柱に滑らせれば、トン、と上の線とほぼ同じ位置に当たって止まる。くすぐつたいような、得意のような気持ちになつてミロは唇を歪めた。学校で会つたら、どんな顔をするだろうか？ なかなか想像できない赤毛の友人のリアクションを考えているとき、窓から大きな声が飛び込んできた。「おい、ミロ！ 学校に行くんじゃないやろっ!」

隣の——といつても、ゆうに三マイルは離れているのだが——カスバート家の爺さんが、小さな荷馬車に乗つて外で首を伸ばして中を覗き込んでいる。

「ごめん！ すぐに出る！」

ミロは叫び返すと、慌てて濡れたズボンと下着を履き替え、昨晚のうちに用意しておいた荷物を背負つて家を飛び出した。

ボタン、乱暴に閉めてしまった扉に一瞬たたらを踏みかけたが、そのまま爺さまの座る御者席の横に飛び乗り、荷物をボンと後ろの荷車に放つた。車軸がキシキシと音を立て、爺さまは揺れた拍子に落ちそうになつた帽子に手をやると、「もつと静かに乗らんかい」と孫のように思つている少年を嗜めた。ミロは、素直に「ごめん」と謝るとそのまま真っ直ぐに前を見る。

「おつかさんはまだ戻つて来なさらんかね」

「うん。でも、そろそろ帰つてくると思つよ」

ゴトゴトと動き出した馬車に揺られながら爺さまは、そうかね、とだけ言つてそれから先は二人ともものんびりとウインダミアまでの長い道を殆ど無言で過ごした。お互いに、気心が知れている同士、それは豊かな沈黙だった。

ミロは、目に入る景色の全てを金色の頭の中に仕舞い込むべく、貪るように光景を読んだ。青い空も風に揺れる木々の葉も、羽虫の低い唸りも、道端を横切るうさぎも、何もかも胸の中に仕舞い込み取つておく。また来年、夏が訪れるまで目にする事の出来ない様相を匂いと温度、音と光、全て一緒に胸の中にしてしまつておくのだ。

いつか、自分と同じだけの強さと感性でこの感動を共有してくれる人が現れるまで、それまでは自分一人の胸のうちに大事に仕舞つておくのだ。一瞬、あまり案内する時間がなく、農場の手伝いばかりさせてしまった級友の姿が頭を過ぎつた。カミュがこの光景を見たら、どんな事を思つただろうか？ 想像は空虚な夢想でしかなく、ミロはその答えを出す事を急がなかつた。また来年、きつと機会はあろうだろう。そう自分に言い聞かせ、今は一人で故郷の自然に溺れた。

*

十二時五分ウインダミア発、途中オクセンホルム乗り換えの列車に乗れば、ロンドンのユーストンには十六時十五分到着の予定となつている。列車は珍しく運行表どおりに走り、

ミロがさらにロンドンからサリー州のクイーンズベリーへ到着したのは十九時を少し回つたところだった。カスバート夫人が爺さまに持たせたニシンの油付けが挟まつたサンドイッチを手に、ミロはほほ二ヶ月ぶりに降り立つた構内の芝生の上で大きく伸びをした。夕飯の時間は終わつてしまつているが、この時間ならばまだみんな談話室にいらなう。

背中の重い荷物をよつこらせと一度背負い直してから、ミロは人目が無い事を確かめると普段誰も通らない森の中に足を踏み入れた。ここは、二年前のハロウインの晩、ミロが幽霊騒動を起こした森で、校門と各寮をつなぐ小道の丁度真ん中に位置している。小道が森をぐるり迂回しているのでこの森を抜けるとローズ・ハウスの裏手を通り過ぎて、スミス寮までの一番の近道だった。

急ぐ気持ちに押されるように、下草の茂る森の中をミロは勢いよく進んでいた。と、突然耳に飛び込んできた人の声にはつとして足を止める。

「もう、ずつとお前の事を見てきたんだ」

一体誰の声だと首を巡らせると、何本かの木の向こう、たつぷり三ヤードは先に人影が見えた。二人だ。

「軽い気持ちで言つているわけじゃない。真剣なんだ。何度も何度も目問自答した。でも、お前の事が好きなんだ」

ミロはぎよつとした。とんでもない場面に遭遇してしまつたらしい事に気付いて顔に血が上る。今まで気にしていなかった音が突然気になり始め足を動かせない。告白されている側

が低く何か言葉を返したがその声はこもつて良く聞こえなかった。

「ムウっ!」

ミロは悲鳴のような言葉とその声と呼んだ名前にびっくりと体を揺らした。肩に下げていた楽器ケースを取り落としそうになり、慌てて肩を張る。ムウと言えは、スクール・オーケストラの一年上のバイオリン奏者だ。早く寮に着きたくてこの道を選んだというのに、こうなつてはすつかり前進する道は塞がれた形だ。しかし、だからといって引き返したくても音が気になつてその一歩が踏み出せない。

ムウに告白している学生は、必死に身振り手振りを加えて自分の思いを伝えようとしていた。しかし、ムウは常と変わらない静かな様子で、その対比が鮮やかだ。やがてその学生の声や動作はどんどん萎み、仕舞いにはがっくりと項垂れてムウの傍から離れ去る。

ああ、やつぱりダメだったのか。そつと息を吐いて、重い足取りで去る後姿をほんやりミロが見送つてみると、「誰ですか? 先ほどから。盗み聞きなど、品の無い」柔らかく、けれどもピシリとした声が森に響いた。

ミロは首を竦めて隠れていた木立の間から一步を踏み出した。ザザザツ、と積もつていた足元の落ち葉が崩れ、まるでサーフィンのように中腰の格好で、ムウの立つ地面と同じ位置に滑り下りてしまふ。言い訳の言葉など用意する時間は無かつた。

すると、ムウは、おやつ、と黒目がちの大きな目を見開き「君でしたか、ミロ・フェアファックス」と呟いた。そして、しつとりとしたテナーで「暫く見ない間に随分と背が伸びましたね」と言い微笑む。

ムウの柔らかな様子に、詰めていた緊張が解けたミロは、ほつと息を吐いて「すいませんでした」とムウの顔を見て丁寧に謝つた。すると、なるほど、目の高さが、ムウとそんな変わらない事に気付く。謝罪には笑むだけで特に答えなかつたムウの視線を辿ると、そちらは先ほどの男が去つていった方角で、「凄く、気落ちしてましたね」とぼろりと口にしてしまふ。するとムウは深く息を吐くと、何かを吹つ切つたかのような表情で、またにっこりと笑つてミロに言葉を返した。

「我々の年齢での恋という情動は、麻疹のようなものですよ。熱が高く、制御に難く、うまく通過すれば跡は残らない。珍しい病気でも、不治の病でもありませんが、合併症を起こすと厄介です。私たちが置かれているような特殊な環境で、同性に向かう好意などは特に、ね」

ミロは、必死に見えた男の挙動がそんな一言で簡単に括られてしまうのがなんとなく憐れに思えて深く考えずに食ひ下がつてしまつた。「何度も考えたとつて、真剣だつて……オレにもそう見えたけど……」と。

「やれやれ、耳が良いのも困つたものだ」

ムウは後輩の聴覚の良さに素直に驚きながら、ふつと空に視線を走らせて言葉を続けた。

「我々の年代は、第二次成長期の産物である性欲とのせめぎ合いの日々なのです。形はそこにあつても不能であつたものが、ある日突然有能となる。体はその行為に全ての準備が整つても、それを個人の意思だけで自由に行使する事は許されな

い。許されないから、その不自由にさらに意識が集中する」

ミロがムウの視線を追つて空を見上げると、薄い雲と交じり合つた空は淡い水色で、夜の九時までも明るい夏の太陽の光を含んで、きらきらしい。ニア・ソーリとはまた違つた空の色が広がつていた。

「正体の知らない夢遊病のような熱に突き動かされて、熱を注ぎ込みたい対象物を探す。ここには女性という性がないから、もうその熱は同性を対象にしても昇華したいと動く。それが、ボーダー・スクールに於ける恋愛と呼ばれるモノの正体です」

まぶしい太陽そのものを見るように、ムウの目は細くなる。「卒業すれば、本来の性の対象である女性に向けてその熱は移行していくでしょう。そうでなくともここは狭い、まるで小さな盪の中のような世界なのです。一度その堰が消え、広い世界に出れば、これまでと比較にならない程の出会いがある。今、この瞬間に真実だと確信する答えも、それは小さな世界に居る中でのお答えでしかない。環境が変われば、答えは変わり、また変わるべきなのです。そして、私達の誰一人として、真実といえる言葉を採り当てるには経験が少くない」

だから、彼にはあの答えでいいのです。そう言つたムウの

横顔は、ひっそりとしたものを隠してとても静かだった。ミロは息を詰めた。

「もしかして、ムウも好きだった？」

「あなたには、遠慮という言葉が無い」

ムウはくつりと笑い、一つ息をすると、背筋を正して歩き始めた。そのスマートな後姿を追つて、ミロは膨れ上がったリュックサックと楽器、そして片手にニシンのサンドイッチを持つて歩き始めた。

「いい友人でしたよ。普通の友人よりは近しく思つていましたから……でも、距離を置かなくてはならないでしょうね」

「距離を置くつて、どうして？ 別に、今ので嫌いになつたわけじゃないだろう？」

ミロは、ムウの言葉にびつくりした。好きだと誰かに告げて、その後その告白した人物から突き放されたら、それは、かなりキツイ事ではないかと思つたからだ。ミロ自身、一年前にサガに好きだと告白し、それはやんわりと拒絶されたという形で終わつたが、その時もその後もしサガのミロに対する態度は全く変わらなかつた。もしサガがその後、自分を避けるようになっていたら、それはかなり痛かつたらうし、苦しかつたらう。そう思うと顔も名前も知らない男が気の毒になつた。

「君は……」

ムウは、ミロが零した個人的な思い出とそれに基づく自分

の言葉への感想に一瞬目を見開き、それから苦く笑つて言つた。
 「君の場合とは違いますよ。君は、まだ肉体に支配された熱の怖さを知らない」

その声は、それ以上の反論を受け付けぬ厳しさがあり、ミロの言葉を封じるにはそれで十分だった。

ローズ・ハウスのバック・ヤードまで、二人とも黙りこくつて歩いた。そして、裏口に差し掛かつたとき、ムウはいつもと同じ笑顔をにつこり浮かべて、「それでは、また練習でお会いしましょう」と一言残すと赤煉瓦の建物の中に姿を消した。その後姿を、ミロは胸の中になんともいえない消化不良の感情を抱えながら見送り、それはスミス寮の明かりを見るまで胸のうちで燻っていた。

寮に戻り、つい六月まで使っていた部屋に戻ろうとして階段を上りかけたミロは、慌ててその足を二階の談話室へ向けた。学年が替わつたのだから部屋も同室の人間も替わつていくはずだ。今度はいったい誰と一緒にいるのか。

不安と期待、どちらが勝るかと言えは不安だろう。本来ならスミス寮のハウス・マスター、ベネットの部屋を訪ねれば分かる事なのだが、重い荷物を置くことばかり考えていて失念していたのだ。同学年の人間が居れば誰か教えてくれるだろう、と談話室を覗けば、案の定そこには教人の第五学年の生徒がボードゲームに興じている。その中に、アイオリアの

癖の強い金茶の頭とカミュの赤い頭を見付けて、ミロは途端に熱くなった胸を呼吸で押さえてその一団に足を伸ばした。すると、ふつと顔を上げたアンソニー・スミスが声を上げた。
 「ミロ?」

スクール・オーケストラでピオラを弾く、普段滅多に大声などあげないアンソニーの声に、その場に居た少年たち全ての視線が動き、ミロのひよろりとした体に突き刺さった。「凄いい! 随分背が伸びたね!」とアンソニーの驚嘆を皮切りに、ウォルト・パーシー、アンドレ・リチャーズ等の声が、「うわー」とか「おー」とか「へー」となどと重なり途端に談話室の一角は賑やかになった。

予想を上回る同級生のリアクションと、なんとなくカミュの視線を感じ、ミロは頬が火照るのを感じた。目の端でカミュの赤い色を意識しつつ「あのさ、俺の部屋どこか知らない?」と口にすれば、「うっわーっ! オマエ、声まで変わってんじゃん?」とエドモンド・ハウが叫ぶ。いつ変わったのだ、何インチ伸びたのだ、じゃあもう下も生えたのか、口々に騒ぎ囁し立てる第五学年に、上級生の咳払いが発せられる。

一瞬しんとして、そして次にはひそひそと声を潜めて、少年たちはミロの一夏を探り出そうとする。なあ、なんで声変わりしたんだ? 好きな女の子でも出来たか? もう出るのか? と。その一々に律儀に答えながら、ミロはざり気無くカミュの表情を探った。少し、目を丸くしてこちらを見ているような様子に、下手な言葉は返せないな、と思つていると、

背比べが発展して体をもみくちやにされ始めたミロに、アイオリアの声がかかる。

「オマエの部屋、三階の十五号室。荷物置いて来いよ」

その言葉に微妙に重ねられた皮肉のような色がミロの皮膚を刺激したが、そろそろ背負うにも意欲してきた大きなリユックと肩に食い込む楽器から解放されたいという思いが優先されて、同室の人間を訪ねるより先に歩き出してしまっていた。すると、「荷物、持つよ」と横から静かな声がしてふつとずつと左肩に食い込んでいた楽器の重さが消えた。カミュだった。ありがたい、というタイミングを逃して、口の中で「あ」とか「う」とか言うだけ終わってしまったミロの様子になどまったく構う風もなく、カミュはさつさと談話室を後にし廊下を進み階段を上り始めた。ミロは急いでカミュの横に並んでみるが、家につけた印よりカミュの背がまだ少しだけ高いような感覚に気付いた。

ちようと階段の踊場に差し掛かったときだった。カミュはそれまで前を見ていた視線をミロに向けて、ふわりとミロに笑んだ。

「声、変わったんだね。おめでどう。お母さんはもう戻ってきた？ お父さんは元氣？」

思わぬ距離で、赤毛の少年のやさしい笑顔を見てしまったミロは、瞬間、ぱつと顔を赤く染めた。不可抗力だった。不意打ちと言ってもいい。今まで、見上げてはかりいた表情が、殆ど真横にあるのだ。その見慣れなさに驚いただけだ。と、

自分の落ち着かない挙動をとっても綺麗に見えたカミュ・パロウの笑顔のせいにして、ミロはくいつと前を向いて質問に答えた。

「父さんは元氣。母さんはまだイタリア。声は……変わったなら、おめでどうなのかな？」

電話口で、ミロの変声を嘆いていた母の声が記憶に新しく、ミロはそのどう処理していいか分からない戸惑いをそのまま疑問として口に出した。

「それは、そうだよ。だって成長の証なんだから。一生変わらなかつたら困るだろう？」

カミュは、ふと微笑み、皆色々なことを言うけれど、それは間違いなくめでたい事だよ、と、言った。

「なんだか分からないけど、伯父さんにはもう子供が作れるんだから良く考えて行動しろって言われたよ」

息子の声を聞いてひとしきり残念がったミロの母は、すぐに受話器を長女の夫に渡してしまった。その前に何か短いやり取りがあつたらしいが、それはミロには聞こえず、問を置かず真面目くさった叔父に先の言葉を言われたのだ。自分の父親からは、何か困った事があつたら相談に来なさい、と一言言われただけだったので、それから暫く続いた陽気な叔父の忠告はそれなりに面白くもありいつか参考にもなるだろうと思われたのだが、こうしてカミュと話しているとうとう自分の家族は普通とは少しばかりズレているような気がして落ち着かなくなる。

誰も居ない廊下で、自分の薬盥を手にしたカミュと二人で並んで歩くと、直ぐに十五と数字の書かれたプレートが下がる部屋に辿り着いた。あつというまに終わった短い道行に、少しミロが落胆を味わっていると、カミュはざつざつと扉を開け中に入っていた。

少し窓が開けてあつたのだろう。外の湿気た匂いが鼻を付いた。なんの躊躇いも見せずに壁際のがらんとした個人スペースにミロの荷物を立てたカミュの背中を追い、そして反対側の窓際にあるスペースを見たとき、何かミロの中でちりちりと騒いだ。見覚えがあるのだ。整理された本の置き方、しっかりとベッドメイキングされた寝台、そして、なによりそこに漂う空気に。

「また今年も一緒の部屋だよ。宜しく」

そう言つて振り向き笑つたカミュに、ミロは特大の安堵と胸が跳ね上がるような嬉しさを感じた。

「アイオリアもまた一緒だよ。去年、三人で狭い部屋を使ったから、今年は引き換えに四人部屋を三人で使つていって事になったらしい」

カミュの説明を聞きながら、ミロは背負っていた重い荷物をどきりとベッドの上に降ろした。それでアイオリアの先ほどの口調に納得がいく。要は、これでまた「腐れ縁」だと言つていたので。

いかにも重そうだった荷物を降ろして、うーんと背を伸ばすミロをカミュは目を細めて見つめた。

「随分背が伸びたね」

「うん。夜中に骨がきしきししていた。今も時々聞こえるかな。柱にき、印つけたじゃん？ カミュの身長とオレの。今朝測つてみたらカミュの印のとこと殆ど変わらなかつたけど、なんか、まだちよつとカミュの方が高いよな」

にやつと、あまり得意気に見えないよう興奮を抑えて話すミロを、カミュは眩しい思いで見つめたが、口にしては「そう簡単にはね、抜かれないよ」と言うにとどめた。カミュの言葉に、ミロは「なんだよ。けちだな」と口を尖らし、カミュはずつとミロから感じていた「大人」の雰囲気霧散した事に思わず破顔した。

まだ今までのミロの子供らしい無邪気な所は残っている。けれど、確かにミロはこの夏で体のみならず精神的にも成長したのだ。恐らく、母親不在の中、父親と二人きりである農場と家事を切り盛りしたのでろう。してのけた事が、ミロの自信になったのかもしれないし、ごく自然に大人への階段を上させたのかもしれない。小さな体にはちぎれんばかりに押し込まれていた活力が、今はのびのびとしなやかに成長した身体に漲っている。

二人して部屋を出て、また談話室へと戻る道すがら、カミュはミロの周りに、二週間共に過ごしたニア・ソーリの夏が透き通つた空気のように漂っているように思えて、懐かしかった。

*

一年の中でもつとも安寧から遠い月が九月だろう。新入生たちは甲高い声で構内を行き交い、虚勢を張る新人はそうそうに上級生にその芽を摘み取られかかる。上級生たちは常に自分たちが積み上げてきた秩序を乱す者の上に目を光らせ、早いうちに無邪気にして傲慢な新参者に灸を据える機会を虎視眈々と狙っている。

最上級生と最下級生の間、微妙な学年の生徒らも単純な順繰りシステムに自らの落着点を見つけるまで多少の時間を必要とする。一つ学年が上がる毎に、上級生としての自由が手に入り、押え付けられていた頭の動きが軽くなる。そしてその自分分らが今度は下級生の頭を抑えに掛かるのだ。誰も彼もが、混ぜたての水溶液の中の分子のように沈殿する事も溶け切る事も出来ずに落ち着かない。

ミロもまたそんな学生たちの一人だった。つい昨年まで全校生徒の中でも下から数えた方が早い位置にあつた身長がこの夏に急激に伸び、新しく入つて来た学生たちの大群を見回して、自分より小さい者が増えてきた視界にまだ馴染めない。かといつて、マックスやウォルトのように胸を反つて「上級学生でござい」と澄ました顔も出来ず、そんな自分が中途半端に思える。

しかし、そのふわふわとした感覚が続いたのも九月五日火曜日、最初のオーケストラの練習日までだった。

スクール・オーケストラ、クイーンズベリに三つある楽団のうち一番編成が大きいことから通称大オーケストラと呼ばれてきたミロたちの所属するオーケストラは、今年からクイーンズベリ交響楽団と呼称を改めることになった。専科生達が始どを占める管弦楽団が今学期からより大きな規模のオーケストラに改編された結果の変更だ。中身は同じでも、スクール・オーケストラと交響楽団では、語感から受ける印象が全く違う。いかにも上等そうな名称に、今年は多数の入団者が見込めるはずだと、上級生たちは勝手に重い期待を第五学年生の上にかけていた。

新学期最初の練習の後、勧誘の為の役割分担が話し合われた。勧誘委員長には、上級学年からの推薦でトロンボーン奏者のマックスとパーカッションのカミュが同票を集め、くじ引きの結果カミュと決定した。こんな時いつもカミュと競り合うファゴット奏者のウォルトは、学年末にGCSEを控えて教育熱心に拍車がかかっている母親から釘を刺されて今学期は学業以外の活動には厳しい制約があり役職は悉く辞退する構えだった。

第五学年の特徴を一つ挙げるなら、俄かに学問と将来への焦りを生徒達が自覚する年といえるだろう。うまく将来に繋がる役職ならば狙うが、それ以外の面倒な仕事は他人に任せ回避する。これまでもちらほらと見え隠れしていたそんな思惑が、徐々に明け透けになつてくる。面倒事を背負い込むのは、余裕のある人間か、要領の悪い人間がやればいい。そ

ういふ言葉にならない雰囲気により露骨に漂い始める。

その日は別の課外活動があるから駄目だ。放課後はレポーターが忙しい。自分の都合をここで言っておかなければ損を被る、と主張してくる生徒達の中で、カミュは粘り強く話を纏め上げ、結局新入生勧誘の中心メンバーは、先のマックス・ピオラのジェームズ・コリンズ、コントラバスのマーチン・スクージー、バイオリンのジョン・シェパードとフルートのジョナサン・ブリッジ、そして、ミロという事に落ち着いて。早速、九月の十四日に予定されている見学会に人を集めるべく、ピラを作成し配布しようという話になり、文面や誰がデザインをするのか、いつ何処で何枚まくのかという細々とした予定と数字に議題は移る。

ミロは、丸くなって案を出し合う仲間の頭の隙から、ちらちらとカミュの顔を覗いた。いやな顔一つせずにリーダーの役割を引き受け、今もノートに細かく皆の意見を書き込みながら油断無く全体の流れを見つめている。厭しすぎず、だからといって碎け過ぎていない表情が彼自身の穏やかな自信とうまく交じり合つて綺麗な安定感をみなに与えている。

カミュは、いつでも役の擦り合いには混ざろうとせず、淡々と自分の出来る事を、また難しい事でも努力をもつて成し遂げてきていた。相手を蹴落とすような競争には一切入り込もうとはせず、ただ自分自身の努力のみで立とうとする志が、ミロには好ましくそして清々しい。

ミロは、第四学年時のダンス大会、演劇大会と悉くカミュと

は接点の無い役割分担のグループに属していた。今回、一番乗りには勧誘委員に名乗りを上げたが、これには理由がある。こうして一緒に係りになれば、今度は自分がカミュをサポーター出来る立場になれると考えたのだ。多くの学生らには気乗りしない面倒な任が、ミロには心躍る担う価値ある特権のように思っていた。

「クイーンズベリ交響楽団、全パート募集中！ 初心者大歓迎！ 説明会は、来週の木曜日、音楽棟、ロバートホール最上階八角堂で！」

三日後の木曜日の正午、ミロとマックスは出来立てほやほやのピラの束を持ってビック・スクールと呼ばれるクイーンズベリで最も古い建物に繋がる回廊の一角に陣取り声を張り上げていた。新人生は今日、ランチを教授陣とここ大ホールで取るのだ。

「クリケット、スクールチーム入部希望者は、今週の土曜日第三グラウンドに集合！」

もちろん他のクラブも、ぞろぞろとホールへ入っていく新入生たちに向かつて声を張り上げている。

「クイーンズベリ交響楽団！ 寄つてけ、見てけ、今ならお得な初心者安全保障付き!!」

運動部の呼び声に掻き消される宣伝を、マックスが腹を突き出し反り返りながら叫ぶ。

「くつそ忘れてた。お昼、今、全然声出ねえんじゃん」

顔を真っ赤にして一声を発したマックスが、喉をさすりながら横に立つミロを恨めしげに睨んだ。ミロは、マックスを上目遣いに見、濟まなそうな表情を作ると、軽く肩を竦めて見せた。場所を取るなり勇んで声を張り上げたミロの喉は、ものの五分でスカスカに枯れ、今は空気の掠れた摩擦音しか生み出さない有様で、にこにこ愛相笑いを浮かべて新入生の手にビラを握らせるしかできない。こんな事ならマーチンを今日の当番にするんだつた、とマックスはこぼした。

「溜息つくなよ。ビラ、結構捌けるじゃないか」

ミロの、暖れて殆ど音の無い声がマックスに反論したのと、彼の制服の袖がつんと引つ張られたのは同時だった。びつくり、というようにマックスから視線を回したミロの目が、彼の正面に立ちまっすぐに自分を見上げている新入生の眼差しとビタリと合わさった。薄い金色の髪、その下に透けるピンク色の皮膚。北欧の血が流れているのか全体的に体の色素が薄い。入学した頃のミロとかわらぬ程の華奢な体軀に、儂さをガンとして拒絶する強いアイズ・ブルーの瞳が嵌め込まれていて他者を圧倒する気迫の発現地となっている。

ミロとマックス、二人して気を呑まれたような形でこの新入生を見下ろしていると、小さな少年はにっこりと笑って「先輩、バイオリンを弾いているでしょ？」とミロに尋ねた。

「どうして分かったんだ？」

裏返つてしまふ声に顔を曇めながら、ミロが疑問の形で少年に答えると、「だって、手がバイオリン弾きの手だから」と

不敵な表情での返事が返つた。

「まあ、ビオラでも同じだけど、ビオラをそんなに何年もやってる人は少ないし。室内じゃなくて、交響楽団の勧誘ややってることは、専科生でもないだろうから、ビオラの専科生っていう可能性もないし。そのくらい、手を見ればすぐ分かるでしょ」

なんと自信満々な新入生だろう。ミロがこの少年に抱いた始めての印象はその一言に尽きた。隣のマックスなどは、上級生に対する遠慮のまったく見えないこの少年の態度にあからさまに眉をひそめたが、ミロは違った。興味津々の体で「音楽専科生？」と少年を見返した。少年は、屈託無く頷き「楽器は先輩が当ててみてよ」と切り返す。

予想もしなかった挑発に、ミロは一瞬目を見開いたが、直ぐに落ち着いて目の前の少年を観察し始めた。少年は、少しからかう様な色を目に浮かべ、そこには期待も同居していた。肩はそれほど張っておらず、腕の長さに歪なものは見えない。楽器といつたのだからボールのような音楽ではないのだろう。ミロは、くつと顎を引いて目を細めた。管の人間かそれとも弦か、そのどちらでもない可能性もある。例えば、カミュのようなピアノとか。有り得ないことではない。同種の楽器ではないからこそ、冷静にその楽器の特徴を掴んでいる事がある。それに、ピアノはその万能性から音楽の造詣が深い。カミュと、一年台奏を組んで知つた事だ……。

集中して固くなつた首をぐりつと回してから、ミロは意を

決して「ピアノ」と声にした。囁くような声になってしまつたが、少年には届いたらしい。ぱつと表情を明るくした新人生は「当たり前」と嬉しそうに言つた。

「凄いな。どうして分かつたの？」

「お前だつて当てただらうが？」

「だつて、僕は専科生だよ？」

少年の言葉には、懸けるものを既に定めた者特有のプライドがあつた。その鮮やかさに、ミロは一瞬胸を打たれた。

「お前、名前は何？」

「ジョシユア。ジョシユア・ミラー。専門はピアノだけど、バイオリンも弾ける」

今まで知らん振りを決め込んでいたマックスがぱつと振り向いた。ミロも一瞬息を呑む。毎年、バイオリン・パートの新入生集めには、他のパートには無い厄介な問題が付きまとうのだ。兎に角、一人でもいいからそこそこ弾ける経験者を入団させること。そうでないと、五年後のコンサートマスターの選出で、大きな揉め事となる。初心者大歓迎の看板に偽りは無いが、バイオリン・パートにだけは少々の仕掛けが必要だつた。ミロ自身が、二年前、そうした政略の体験者だ。

ミロは注意深く相手の反応を伺いながら、「お前、オーケストラに興味あるのか？」と探りを入れる。マックスの視線が背中に痛い。

「うん。でも、多分室内に入るけど。専科の先輩は皆そつちに居るからね」

ミロ達の思惑など知らぬジョシユアは気楽に言う。ミロは一瞬、専科生で固められた室内楽団の鼻につく気位の高さを思い出し、その言葉に反発を覚えたが、すぐにそれを払拭して「こつちも面白いんだぜ」と言つた。

「特に今年は上級第六学年の専科じゃない学生が、チャイコフスキーのバイオリン協奏曲を弾く。彼は凄いなよ？ この学校始まつて以来の弾き手だつて評判だし、教授のお墨付きだ」

ミロが、九月十四日の公開練習日の日程と今年の十二月に行う定期演奏会の演目が刷られたヒラを差し出して見せると、ジョシユアはあつさりとそれを受け取つた。

「チャイコンにエルガーのエニグマ、ブラームスの三番か……結構大曲をやるんだね。交響楽団はへたくそだつていうのは、ガセなのかな」

半ば独り言で口にしたジョシユアの呟きに、ミロは初めて眉間にしわを寄せた。

「室内よりうちが下つて見るのは勝手だけど、それを自分の意見として持ちたいんなら、きちんと自分で比較して決めるよ。人の意見で決めんじやなく。」

俺に言わせりゃ、室内の連中のやつてる事の方がよっぽど音楽としてはなつてないんだからな。見栄の張り合ひでさ。誰も彼も、自分が目立つことしか考えてない。特にバイオリンなんか最悪だ。ファーストに執着して、何の為にファーストとセカンドがあるのか考えようとしなない。オケは、個々の楽器が他の楽器と手を繋ぎあつて、初めて一つの大きな楽

器になるのに」

みつともなく裏返ったり掠れたり忙しい喉に苦勞しつつ、ミロは持論を展開し、一区切りつけた。そして、その時はじめてジョシユアが少し目を見開いて自分を凝視している事に氣付き、自分の熱さに思い至りたじろいだ。

「とにかく、一度聞きに来てみようよ。専門がピアノなら、専科で占められている室内で、パイオリンをやるのは楽じゃないぜ。色々決めたり、言ったりするのはそれからにしても遅くはないだろう？」

ミロが口の中に沸いた苦いものを飲み下して、言いたかった言葉を言い終えるとジョシユアは素直に「うん、それはそうするよ」と答えた。

「でも、その前に、一度先輩のパイオリンを聞いてみたいな」あつけなく自分の言葉を承諾されて緩んでいたミロの胸に、ジョシユアの言葉はドンとぶつかつた。「俺の……?!」口からやつと言葉を吐いたミロに、ジョシユアは瞳をにっと細めた。音楽の事で自分を納得させたいのなら、まずはお前の音を聞かせろ、とその瞳は語っているようだった。

傍で成り行きを黙って見守っていたマックスが高く口笛を吹き「いいじゃん。聞かせてやれよ。お前だつて再来年のコンマス様だろ？」などとけし掛け、ジョシユアの瞳はますます輝いた。

「へえ、先輩、先輩の名前は？」

「ここにこそ愛想良く訪ねられて、ミロは観念して答えた。「ミ

ロ。ミロ・フェアファックス。分かつた。それがお前の希望なら何か弾く」と。するとジョシユアの口角がぐいつと持ち上がった。

「火曜と木曜と土曜がこつちのオケの練習日なんだよね？じゃあ僕、今度の日曜日に十時からロバート・ホルの四番練習室を借りてるんだ。先輩、もし時間があつたら、来てくれると嬉しいな」

相手の都合を優先しているようで、変更の予定など欠片も見えない言葉だつた。日曜の十時、時間は空いている。けれど、十分な練習をして来週に、などと日延べすればその間にジョシユアは室内への入団を決めて、今せつかく芽生えた交響楽団への興味はどんどん薄れていくだろう。ミロの音に納得が言つていたので、弱腰は見せられない。ミロは「行くよ」と簡潔に返事をした。単純な興味ではない、値踏みされるプレッシャーを生まれてはじめて感じながら。

昼のこの一幕を、早くカミュに報告し相談したいと思つていたミロにこの日はなかなかチャンスが訪れなかつた。木曜の午後の授業は選択教科が占めていてミロとカミュのクラスは全て異なるものだったからだ。結局、午後の最後の授業が終わるまで、二人は廊下ですれ違ふ事も無かつた。クロッキー帖と木炭が入つたベンケースを掴んでミロが美術棟を出、部屋に戻つた時には、オーケストラの練習が始まる十分前とい

うぎりぎりの時間で、当然そこにはすでにカミユの姿は無い。ミロは楽器を掴むなり飛び出した。

今頃マックスからこのあらましを聞いてしまっているかもしれないが、それなら休憩時間にどんな曲を聞かせたいのかを相談すればいいのだ。どんな提案が返ってくるか、走りながらにでも想像するのは楽しかった。もしからしたら伴奏を頼めるかもしれない。そうすれば、バイオリンの独奏より見栄えもするだろう。しかし、カミユは日曜の午前は聖歌隊に顔を出している。それを蹴って自分に付き合ってくればとても嬉しいし心強いが、どうなるだろう。カミユは勧誘委員長だし、経験者のバイオリニストを入れるのはとても重要な責務だ。もしかしたら、もしかする事もある。ミロは期待に胸を膨らませながら、八角堂へ飛び込んだ。

練習用のホールには、もう殆ど人が揃い着席している。ミロは担いできたバイオリンを窓際の壁で下ろすと急いで楽器を取り出した。「相変わらず無駄に元氣だよな、お前」とベースのマーチンがミロの背中を太い弓で突付いた。

ピットの前方から、ビオラとバイオリンの間をすり抜けてミロが自分の席に腰を下ろし、ほっと息を吐いた時、ホールの引き戸が開き、顧問のブラウンが一人の女性を伴って八角堂に現れた。女性は、バイオリンの教官のエバンスだった。ざわり、と空気が揺らいだ。団員の中に奇妙な不安が広がり、それはブラウンの第一声で明確な形となった。

「皆さんに、残念なお知らせがあります」

指揮台の横に立ったブラウンがゆつくりと生徒を見渡しながら静かに語り始めた。

「今年コンサートマスターとして、またソリストとして活躍してくれる予定だった、サガ・チエトウィンド氏が、前学年をもつて中退するとの連絡がありました。彼は今年六月にAレベル試験を既に受けており、今後は自宅で将来爵位を継ぐための勉強をされるそうです。従って、チャイコフスキーのソロは、ミス・エバンスにお願ひする事になります」

しんと沈黙が広がり、その後、広い部屋に低くうねる波のようなざわめきが往来した。ミロの目に、ムウとイヴンが、サイモンとベンジャミンが、互いに何か話し合っている姿が見えた。隣に座っているエリックも、何かミロに言いたそうにしていたが、ミロの硬直を見て取ると直ぐに後ろの席の会話に加わった。八角堂に充滿する無秩序な人声の重奏にミロは喘いだ。胸が苦しく、「中退」という言葉が頭の中でがんとこたました。サガが、もう学校に来ないなんて、もう一緒に楽器を弾けないなんて……そんなの、

「ウソだつー」

ミロは叫び、立ち上がっていた。皆の視線がミロの体を刺した。ミロは拳を固く握り、何か言葉を続けなければ、ウソだと証明できる根拠を見せなければ、と焦った。

「そんな……サガは、そんな無責任な人間じゃない！ 本番を前にして、途中で全部放り出すような事をする人間じゃない……！」

ミロは震える声を叱咤し続けた。

「サガは、一年前に、シオンがコンマスを降りるって言った時、どんなに困ったか知ってる。そのサガが、今度また自分が同じ真似をするなんて事、絶対にありえない。コンマスを引き受けたのも、ソロをやるって言ったのも、相応の覚悟をして引き受けたはずだ。それを、みんなに相談も無しに一方的に降りるなんて、そんな卑怯な真似、あの人がする訳が無い！ サガの本意じゃない！ 絶対に何かあるんだ！」

それなのに、代役だなんて、ブラウン教授もどうかしている！ ミロはブラウン教授を睨みつけた。しかし、教授はそれには全く怯まず、柔らかにミロを諭した。

「フェアファックス、チエトウインドは、ご実家の都合で中退を選んだのだ。彼も、もう立派な大人だし、たとえご両親の意向を尊重したのだとしても、本人が納得しないものを無理強いは出来ないだろう。」

手紙は彼本人の字で、最後の舞台に乗れないのは残念だが、必ず聞きにくる、と書かれていたよ。彼がどれだけこのオーケストラを愛していたか、それは君が一番よく知っているのじゃないかね？」

敵かな語りは、ミロへの説得という形をとって全ての団員に向けられた言葉だった。団員の顔の上に諦めの色が点々と灯り始め、それを見て取ったミロは、楽器をケースにはつと仕舞い込むとそのままホールを飛び出そうとした。何が何でも真意を確かめ、サガの本意を確かめなくてはならない。そ

して、なんらかの圧力がサガの上にあるのなら、それを消す手助けをしなければならない。サガは、ミロにとつて最も尊敬するバイオリン奏者であり、団に必要な人間だ。弾丸の勢いでホールを横切り、ドアの取っ手にミロが手を掛けたその瞬間に、エバンスの呆れ果てた声が響き渡り、ミロの足を縫い止めた。

「あーあ。どうしようもないわね。このオケは、教授、悪いけど、私、ソロ降りるわ」

降りてくられて結構だ、とギツと昨年一年間の担当教官だったエバンスをミロは睨み付ける。けれど、彼女の声はそれでは止まらなかった。エバンスは、半年前サガの苦しみに気づかず、遂に楽器が弾けなくなるまで助けようとしなかった団員を厳しく糾弾した。そしてミロを顎で指し「コンチェルトはソロとオケで一心同体、阿吽の呼吸ってやつがなきやつてられないのよ！ 外から連れて来たソリストならともかく、彼はあなたたちの仲間でしょう？」と一喝した。

「挙げ句の果てに、リタイアしたら卑怯者よわばりなんて。そんな思いやりのないオケとコンチェルトなんて、私やつてられないわ。あんたたちで、なんとか代理のソロ探さない！」

文字通りの捨て台詞を吐いて、扉の前に仁王立ちになっていたミロの体を突き飛ばすような形でエバンスはヒールの足音高く団員を置き去りにした。エバンスの靴音はミロの胸に突き刺さった。その音は、まるで「IDIOT! IDIOT!」嗤し立てるようだった。

蜂の巣をつついたような騒ぎが八角堂を満たした。「お前が余計な事言うから……」と誰かが舌打ちと共に呟いた。

「じゃあ、サガ以外のヤツのソロで本番やりたいのかよッ!! 本番に体裁さえ整えられればそれでいいのかよッ!!」

ミロの罵声に、何人かの学生の顔が強張った。

「着席しなさい。ミロ・フェアファックス」

冷たい温度の音がミロの耳に届く。はっとして声の主を探せば、第二バイオリンの最前列に座ったムウが、じっとミロを見ていた。さらに気付けばホールの中はしんと静まり返り、皆の視線が一身に集中している。ミロは歯を食いしばって、固くなつた足を動かしもと居た席に着席した。すると、それを見計らっていたかのようにシユラが楽器を床に寝かせて立ち上がった。

背筋を伸ばして起立するシユラは、団員を一眺めすると指揮台の横に立っていたアラウン教授に「一言三言話しかけ、団員総会の許可を取り付けた。

一瞬、またホールはざわついたけれど、それもシユラの一瞥によつてヒタリと収まる。

「意見のあるものは拳手の上指名を待て」

シユラの厳しい声に、同じく最上級生のファゴットのトニー・マクファーレンが右手を上げた。

「オレも出来ればチェトウインドのソロで最後の舞台上に臨みたいが、まずは他の奴らがどう思っているか聞きたい」

シユラは軽く頷き、それを合図に数十分に渡る様々な意見

の応酬が始まった。

ミロが心から安堵した事に、積極的なサガの復帰を望ましい声は聞かれず、可能であればサガの演奏で十二月の板に立ちたいと皆の希望は一致した。議題は具体的にどのようにサガを説得するか、という事に移り、何人かの代表者を送る、という意見から、署名活動、電話、手紙、など喧々譁々やつた後、今度の十曜にサガを直接説得もしくは彼の真意を確認する為に、週末の外出を認められている第五学年以上の学生みんなでサガの実家に行こうという事で帰結し、その日の練習は解散となつた。

*

「どう考えてもおかしいだろう?」

消灯時間をとつくに過ぎ、日付まで変わろうかという時間に、スミス寮の十五号室ではまだひそひそ話し声が續いていた。ミロのものだった。

「二人がなんかおかしい、っていうのは春先から分かつてたんだ。でも、サガに聞いても笑って大丈夫っていうだけだし、ロスは余計な口出しするまで終わりだし。でもさ、親友だぜ? いくら喧嘩したからって、親友が窮地に立つているのにならん顔ってのはおかしいだろう?」

窓から頼りなく注ぐ月明かりを頼りに、ミロは夜の空気に溶け込んで見えにくいカミュの表情を探りながら言う事をき

かない声帯を操った。交響楽団での臨時総会で、アイオロスは一言も発言しなかった。そればかりか、我関せずの空気で体にまとわりつかせて、「サガ奪回」に向けての熱意すら感じられない有様だ。サガの中退に対する疑問と、アイオロスの冷酷でも無視でもない「無関心」な姿勢はミロの胸と脳に深く爪を立て神経を高ぶらせた。

消灯後も、ベッドの中で一人悶々と考えを巡らせていたが、どうしても納得出来る答えを見出せず、したがって眠る事も出来ず、結局堪えきれずにミロはカミュを呼んだ。「起きてるか？」と。ミロとは別の理由からであったが、カミュもまた二人の上級生の事が頭から離れずにいた。ミロの耳に「起きてるよ」という柔らかな声が届くのに時間はかからなかった。既に就寝しているアイオリアの妨げにならないように、二人はアイオリアのベッドから一番遠いカミュの寝台の上に居た。カミュは枕を壁に立てかけて寄りかかり、ミロはベッドの下手で胡坐をかいている。

昼間に起こった出来事——バイオリン経験者を勧誘できるかもしれない、という話から、ジョシユアにどんな曲を引いて聞かせればいいのかカミュに相談を持ちかけるというミロの心積もりは、八角堂での嵐が薙ぎ倒してしまった。今のミロは、ただ好きというのでも尊敬という言葉でも足りない二人の上級生の間にある不可解な不協和音の謎を解く事に全神経を尖らせている。

「ロス、サガがAレベルテストをもう全部受けてしまつて、

結果も全部Aスターだったからのんびりしてるんだらうって言つてた。でも、ブラウン教授がサガの中退の話をしたときロスは全然驚いてなんかいなかったらう？ って事は、知つてたんだ。知つてたくせに何もしないなんて……」

「知つていたかどうかはあの先輩の場合、外から判断するのは難しいよ」

十中八九アイオロスは知つていたに違いないと、三月最後の日曜にサガとアイオロスの部屋を訪ね、二人の関係とサガの内情を垣間見たカミュは小さな嘘を付いてミロを宥めた。しかし、「本言にそう思うのか？」とミロの言葉が跳ね返り、闇の帳など物ともせず突き進んでくるミロの視線を肌感じて溜息を零した。こちらの表情は見えないはずだ、と自分を落ち着かせようとしてもミロの青い目がすぐそこにあるように思えて顔を伏せてしまふ。

「ミロ、サガ先輩の中退の話と、アイオロス先輩との間の事は分けて考えた方がいい。先の問題に対しては、僕らは土曜日に全員で行つて先輩を説得出来る。でも、後者の問題は、これは先輩たちのプライベートだ。僕らがどうこう出来る問題じゃないし、すべきでもない」

ああ、また嘘を付いている。そう思いながらカミュは無駄に言葉を重ねてしまった虚無感に唇を噛締めた。本当のところは、アイオロスとの諍いこそが、サガのその後の進路を決定づけてしまった核に違いないと、カミュも思っている。アイオロスとの関係性の修復なくしてサガの復帰も望めまい。

そう見通してしまふ自分の冷めた理性が煩わしく、一人で真実を抱え込むのは重い。だから、拉致のない事と承知しているのに、ミロとの会話を終わりに出来ない。

カミュは、窓に被さるカーテンの隙間から零れる淡い青い光の筋に目をやった。その頼りなさが自分の気持ちのありようので、ミロをこの不毛な会話に付き合わせる無益さに嫌氣を覚える。年長者二人の問題を、自分とミロとの関係の瀬踏みとして捉えてしまふ傾向がカミュにはあつた。アイオロスとサガ、二人がもし同性として壁を克服して付き合ひを続けていけるのならば、もしかしたら手を焼くばかりのミロへの気持ちの辿り着く先があるのかもしれないと希望してしまふ。友達として付き合えればいいと思つたはずなのに、ちよつとしたミロの行動で「もしかしたら」と期待し、時間が立てば失望を味わう。その繰り返しに、倦む。それでも、ミロと喋り、こうしてささやかな時間を共有する事が嬉しい。

全くの堂々巡りだ。ミロの氣を落ち着かせて、自分も寝た方がいい。カミュがそう思つた時、彼の素足がトン、と何かに押された。ミロが、足を伸ばしてカミュのそれを蹴つたのだ。

「お前、何か隠してるだろう？」
誤魔化されないぞ、という無言の強い意志がミロの言葉に裏に潜んでいて、それはなぜかカミュの気持ちに刺激した。こちらの意図など、いつもちつとも氣付かぬくせに、何故こゝういう所ばかりに鼻が利く？ と消化出来ない感情がカミュの胸の内にわく。

「隠しているかもしれないけれど、それは、氣付かない君の觀察不足だ」

カミュは全くの本心を口にした。同学年のアンドリュール・シーファやシユラ・コーツのみならず、ある程度人間は既にアイオロスとサガの友情以上の関係に氣付いている。カミュにしてみれば、サガをあれほど好きだと公言しておきながら、またアイオロスを強く慕っておきながら、はつきりと見えるはずの所を意識的に見ないでいるとしか思えないミロの眼差しに疑問と軽い憤りを覚えるのだ。そうやって、時々こぼす自分のささやかな思いも無視されてしまつていのかと思うとやりきれない。

「なんだよ、それ！ やつぱり隠してるんじゃないか！ だつたら話せよ！ ケチ臭い奴だなあ！」

パシンツ、とミロの蹴りが再びカミュの足に当たつた。それなりの力で、その勢いと言葉にカミュは流石にむつとし、抱えていた膝を伸ばしてミロの足を蹴り返した。

「なんでも人に教えてもらおうとするな！ 氣が付かない君が悪いんだろ？」

パンツ、パシンツ、パシツ！ ミロが無言で繰り返してくる足に、カミュもいささかむきになつて応戦し、しまいには剥き出しの少年らしい四本の脚が狭いベッドの上でバタバタと暴れ、寝台のスプリングと足がガタガタと音を出した。そしてカミュがその騒音にはつとしたときにはもう遅く、「何やってんだ。静かに寝ろよ！」とアイオリアの罵声が飛び出し、

二人の少年は互いの足を掛けたまま暫く硬直した。

寝返りを打ったアイオリアから、再び深くゆつくりとした呼吸が繰り返されるのを確認して、ようやくカミュは詰めていた息を吐き出し、気になっていた足をミロから離した。

「ほら、もう寝なよ。明日も授業があるだろう?」

小さく音を絞って出した言葉に答えは無かった。カミュは細く息を吐いて、ゆつくりと再び足を折りたたんで膝を抱えた。すると「なあ」と思いがけない近さから声が届いた。いつの間にか、ミロはカミュの目の前に移動していたのだ。息の暖かさが感じられるような距離に、跳ね上がった心臓が痛かった。しかし、ミロはそんなカミュの痛みなど知りもせず「隠すのつてさ、しんどくないか? 本当に、カミュがそうしたいなら、諦める。でも、お前、いつもそうやって自分のところで全部溜め込むだろう?……?」と囁いた。

見えていない筈だ。この月影で、顔色までは決して分らない。カミュは、頬に集中する血を、己の心臓にそう言い聞かせて治めようとした。額に汗が浮かぶ。唇を湿らせ、一度固唾を呑む。

「プライベートだ」

うまく、常と同じように言えただろうか。冷たすぎはしなかったか、熱すぎはしなかったか。ちょうどいい温度で、言えただろうか。カミュはひしひしと自分の緊張を感じていた。ミロの掠れた囁き声に、とてもいやな衝動の目覚めを促された気がする。

「うん。でもさ……プライベートって、サガとロスの、個人的な問題だつてことだよな? でも、その個人的なはずの問題に、カミュが、悩んでいるみたいに見えるからさ……。だつたら、もうそれはカミュの問題でもあるわけだろう? 俺が言ってるのは、そつちを話してみないかって事」

ミロはふうつと息を吐いて、うまく言えないな、とぼつり呟いた後「カミュが気にしてるロスとサガのプライベートは、絶対に、誰にも言わない」と付け加えた。

カミュは、複雑な気分で、視覚ではただぼんやりとした塊にししか見えないミロの姿を探った。時々こうして突きつけられるミロの勘の良さは、カミュに苦い期待を抱かせる——言わなくても、気付いてくれるのではないかと。大人はみなカミュを、自立心の強い精神面でとても安定した子供だと評価する。しかし、誰がどう褒めそやしても安定した子供だと評は自分の脆さを知っていた。いや、軟弱だと自分で決めてかかっていた。常に周りの動向や思惑を自らの思考に入れて行動を起こすカミュは、場に応じてはつきりとした物言いをする少年ではあったが、それほど素直に本当の自分の気持ちをつと吐露できる子供ではなかった。遠慮か、自制か、それとも防衛か。だからそうして何枚も服を着込み仕舞い込む様に隠した心に気付いてくれる相手があると、無条件に甘えたくなる。そこが、嫌だった。隠すのなら、何故最後まで隠し通さない。と。それ故に、カミュは自分の胸のうちにそんな甘えの芽を見出すや否や、片端からその芽を摘んでしまう。ましてや、今カミュ

がミロから隠したいと煩悶しているものは、カミュのミロに對する淡い思いなのだ。二重に、言えるものではなかつた。

「君が、自分で気付いたことにしてくれ」

短くはない沈黙のあと、カミュは選んだ。勘働きのいいミロは生半な事では引き下がらないだろう。今晚は諦めても、きつと自分を観察し続ける。不本意に自分の秘密がミロに明かされてしまうくらいなら、自分の隠し事を守る為にはサガとアイオロスの方をリークして、ミロの氣を反らす。卑怯かもしれない。けれど、サガとアイオロスの事を知つてミロがどんな反応を返すか、暗い期待が無いといつては嘘になる。カミュは、もう一度、喉を湿らせて呼氣を整えてから言つた。「君はさつきあの二人を親友と評したけれど、少なくとも僕の目には、それ以上の關係に見える」と。

ミロはカミュの指し示す答えが掴めず考え込んだ。まだ仲の良かった頃の二人が頭の中に蘇り、ふと「恋人同士」のようだという言葉が頭を掠めた。そして、心臓が「ドクン」と一つ強く脈打つ。何か、生々しく、見たくないものを見るような、容易には口に来れない嫌悪感がざわつと皮膚を走つた。

互いに黙りこくる不自然な間の中、ミロの困惑した氣配を察知したカミュは、もつとはつきり言わなくてはだめかと、小さく溜息をつき「それ以上の關係、というの……つまり、恋愛關係にある、ということだけ……」と呟いた。

その一言が、ミロの脳裏に弾けた。一年前、ジャスミンの生垣を通り過ぎ、湖の畔でサガは好きな人がいると言つた。

やわらかな微笑を浮かべて両思いだと教えてくれた。そして、その相手はミロもよく知つている人だと……それが、アイオロスだつたのだ。毛穴からどつと汗が噴出した。口の中が粘つくように乾く。

「最初に気付いたのは……君が、ロンドンにバイオリンを直しに行つた去年の二月のことだ。あのとき、サガ先輩が楽器店に案内してくれることになっていて……それなのに、何故か、アイオロス先輩も一緒に来ただろう？」

「うん……」

ミロは、動揺を精一杯隠して相槌を打つた。

「最初は、ただ先輩も楽器の調子を見てもらいたいだけなんだろうと思つた。でも、段々、二人の様子や、雰囲気、何か違和感を感じた。別れる間際に、振り返つて、アイオロス先輩がサガ先輩の腰に手を回して寄り添つて歩いているのを見たんだ。それで、薄々、ああ、そういうことなのか、と気付いたんだ。丁度、二月十四日だつたしね」

「……全然、気が付かなかつた。俺、あの時は楽器が直るつて言つてもらつてはつとしてたし、その後は、カミュと一緒にロンドンで遊ぶつて……それが嬉しくて……」

口腔に貼りつく舌を引つべがし、ミロはようやく言葉を返す。何にそれほど動じているのか、解析が追いつかない。一方のカミュは、ゆつくりと、ミロの混乱が収まるのを待つように、静かに話を続けた。

「うん、そまだらうね。僕は、当事者でなかつたから、逆によ

く見たたのかもしれない。いずれにしても、一度そういう目で見れば、色々別に見えてくるものもあつて……去年の今頃には、自分の推測にかなり自信を持っていた」

「……じゃあ、カミュが悩んでいたつて事は、サガとロスが恋人同士だったつて事か？ カミュはそれで一年も悩んでいたのか？」

「いや、そのこと自体は別に悩むことでもなんでもないよ。二人共自立しているし、僕が気にすることじゃない。問題は、そのあとの事件だ」

カミュは少し言いあぐねるようにして黙りさらに声を落とした。

「去年の十二月、急にアイオロス先輩の態度がサガ先輩に対してよそよそしくなつただろう？ 最初はただの喧嘩だと思つた。恋人同士なら、こじれる喧嘩だつてするだろうし。でも……アンソニーが、意図せずして彼等の関係に気が付いてしまったんだ。彼は一人で悩み続けて、僕に相談してきた。僕もその内容を聞いて、正直驚いた。……彼等の関係は、つまり、既に行き着く所まで行つてしまつていたんだ」

カミュはちらつとミロの気配を探つた。びくりとも動かず、こちらを見ているようだった。その様子から、自分の濁した話を処理しきれないで一杯一杯になつていく様子が窺い知れる。カミュは、なるべく露骨ではない表現を選んでミロの理解を助けようとした。

「アンソニーは、……つまり、その、現場を見てしまつたわけ

だけけど、どうやら、それがきっかけであの二人の仲がこじれ始めたんだ。それが、去年一年の彼等の不和の始まりだった。でも、きっかけはそれでも、彼等がああまでこじれてしまつたのは、他に原因があるらしい。僕もそこまではわからない。……ただ、サガ先輩は、それを受け入れているようだった。アイオロス先輩が何を思っているのかは知らないけどね」

「……サガと話をしたのか？」

軌るような言葉がミロから漏れた。カミュは、サガが何故自分にそんな話をする事に至つたかを知られる訳にはいかかつたのでさらに慎重にこの会話の運び方を検討する。話すべき事とそうでないものの判断が難しく、覚悟と用心が必要だった。

「……話したよ。でも、内容については、僕からは言えない」

「……めん、カミュ……話に、うま……ついていけない。でも、じゃあ、最初は、アンソニーの悩みから始まつて、それをカミュが相談にのつて……でも結果的に二人はそれがきっかけでおかしくなつた。だから今まで悩んでた？」

ミロは、前言で誓つた通り、サガとのプライベートな会談に踏み込むつもりはないようだった。しかし、だからこそ最初の目的である「カミュの悩み」への追求の手は緩まない。ますますカミュ自身の問題の核心に触れられようとしている危険に、カミュはいくつもの先を読み、次の一手をミロの目の前に置く。

「そういう意味では、悩むというのは少し違う？……最初にも

言つたけれど、これは二人の問題だから、僕等には何も出来ないよ。ただ、あの自制心の強いサガ先輩でさえ、このこじれが原因で精神的な負担が周囲に影響を及ぼし始めてしまつて、なんとか改善して欲しい、と心配していたのは事実だけれど……正直、本当に彼等が復縁するのがいいのかどうか、それも僕にはわからないしね。ただでさえ難しいことなのに、サガ先輩の立場では絶対に認められないことだろうから……」

「サガの立場では認められないつて？」

カミュは、ミロの意識が意図したとおりに自分の中心部から反れた事を感じた。うまくいったことに、満足と寂しさを覚え苦笑しながら「だつて、将来の伯爵様が、アイオロス先輩と一緒に暮らすなんて無理だろう?」と言つた。「あ……」とミロの口から声が漏れた。これで、カミュの心配は、「禁断の恋」に苦しんでいた先輩を思いやつて、という図式がミロの頭の中で出来上がるだろう。そう思い、カミュは一瞬間の力を抜きかけた。しかし、カミュの安堵は「でも、好きなら、何か方法があるんじゃないかな? 諦める事はないと思う」というミロの力強い声で破られた。ミロはサガの立場を本当には理解していない「しょうもない奴だ」という気持ちと、常識に囚われない真つ直ぐな思考が羨ましい気持ちとがせめぎ合い、カミュは震えをさうになる吐く息を殺して、ただ苦笑した。それから暫く、カミュはミロの善意の打開策に耳を傾け、頃合をみて「もう眠ろう」と言つた。ミロは、まだ何か言ひ足りなさそうだつたが流石に過ぎた時間の長さに気付き大人

しく自分のベッドへと戻つていった。

ミロの寝台が数度軋んで、カミュも少ししわくちやになつた寝具に潜り込み、はつとした。今まで、ミロが胡坐をかいていた場所が、まだ温かい。カミュは、体を縦にして壁際に身を寄り寄せ、息を殺して眠りの波が自分をさらつてくれるのを待つた。

次の日の金曜から、天気は徐々に下り坂を辿つたが、大遠征の決行日中はなんとかもつて、雨催いの空から時折薄陽がのぞく事もあつた。長い道のりの中、行きに団員の胸に満ちていた不安と高揚は、帰りには安堵と開放感に取つて代わり、電車の中は賑やかだ。サガの父親であるシュローズベリ伯爵との会見は、シナリオにない突発事件が一つ発生したもののスムーズに進み、サガ・チェトウインドは、クイーンズベリへの復讐を承知した。

今回もつとも深く事の成り行きを心配していた人物の一人、アンソニーと暫く会話をしていたカミュだつたが、第五学年のもう一人のピオリスト、ジェームズ・コリンズがやつて来たのを機に、外の景色が見える扉の横に移動した。車窓から見える外の景色はヒースの荒野で、その上には灰色の曇天が徐々に頭を垂れるように静かに下りてきている。明日には雨が降るだろう。そんな事をぼんやりと思つていと、いつの間にか横にミロが居て、腕を組み、右肩と右の額の端を窓ガラスにくつ付けるようにして寄りかかり、同じように外

を見つめていた。

その横顔に、長い睫毛が白く烟っていた。夏の間急激に大人びた輪郭の中で、唯一残ったあどけなさに、カミュの視線は釘付けになった。

以前はミロが「女の子のようだ」と囁かれる一因ともなっていたその長い睫毛は、甘さが消えて少年らしい面影になった横顔の中で、その厳しさを和らげるアクセントに変貌していた。半分伏せられた眼、その臉や頬の透き通るような白さ、鼻梁から少し突起が見え始めた喉へとつづくなめらかな曲線、そのどれもが、まるで淡く光を放っているかのように思えた。ただの友人の横顔をそのように見つめるものではない、と分かっている、それはあまりに美しく、切なくて、目を逸らせるものではなかった。

二

何かにはっとしてミロは目覚めた。窓の向こうはまだ薄暗い。もう一度布団に潜り込もうとして何気なく視界に入った窓の向こうのカミュのベッドに、ミロは嫌な違和感を覚えた。恐る恐る枕元に転がしている小さなおもちゃのような目覚まし時計に手を伸ばし、ぎよっとする。十時八分前だった。外は、雨なのだ。耳を凝らすと空気に溶けるような雨音が聞こえる。

「しまった！」とミロは掛け布団を蹴り上げ、跳ね起きた。ベッドの端に引つ掛けていた服に手を伸ばし、Tシャツを被り、ジーンズに足を通す。大急ぎで羽織ったタンガリーシャツのボタンは、二度掛け違えたところで諦め、枕元に立てかけているオブロング・ケースのストラップを鷲掴んで部屋を飛び出した。「わっ！ つぶねえなあ」出合い頭にぶつかりそうになったマックスの文句など聞こえてはいない。

寮から走り出ると、芝はぐつしよりと水を吸って飽和したスポンジのようになっていた。数歩駆けただけでミロの靴はすっかりそば濡れた。ミロは、水音を立てて一日散に音楽棟を目指して走った。途中、傘を差した幾人かの生徒とすれ違い、彼らはみなもの問いたげな視線をミロに向けるが、それはミロにとって一瞬で後ろに流れている景色の一つでしかなかった。

ゆるやかな長い丘陵の道をひた走りに走り、ミロはやつとのも事で音楽棟にゴールした。玄関ホールで、ケースの中にも入れ替わったハンドタオルを取り出し、雨に打たれた楽器入れを拭い、自分もびしょ濡れになった上着を脱ぐ。ブーンという低い空調の鳴音に混ざって、様々な楽器の音がしんとしたホールに彷徨っている。徐に、足が立っている音に注意を払いながら、ミロはジョシユアの言っていた練習室四番を、ロバート・ホールをぐるり囲むようにしてある通路を進みながら探した。